



TITLE:

京都外科集談会抄録

AUTHOR(S):

CITATION:

京都外科集談会抄録. 日本外科宝函 1954, 23(4): 428-430

ISSUE DATE:

1954-07-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206092>

RIGHT:

京都外科集談会抄録

昭和29年4月例会

(1) 肩胛骨々折の3例

玉 重 亨

我々は最近2ケ年間に比較的稀と言われる肩胛骨々折の3例を経験した。

即ち、高所より墜落した1例は右橈尺骨々頭皮下骨折を併う右肩胛骨横骨折例及び後方に転倒し右肩胛骨部を岩で打つて右肩胛骨粉碎骨折例、更にトラックにはねられた右肩胛骨縦骨折の各々1例である。

何れも直達外力に依る骨折で、骨転位なく、ギプス固定のみにて、治癒したもので、肩胛骨が筋肉群に包まれ、可動性を有するため介達外力を受ける機会が少い為と思われるが、割合軽度の直達外力にて骨折を起し得るものであると考えられる。

(2) 脊椎カリエスに対する病巣廓清術兼椎体固定術の経験例

森田 信, 橋本 東

脊椎カリエスに対する単なる病巣廓清術の成績は他の関節結核の場合と比較すると余り良くない。これは廓清が行われた椎体には大きな骨欠損が生じ、椎骨は椎弓に妨げられて上下の椎体面の接触が行われない為である。

そこで吾々は腰椎カリエス病巣廓清後に生じた大きな死腔洞に腸骨櫛より採取した骨片を打込み、椎体の固定をはかった。その経過は良好で、赤沈値は好転し、術後45日目のレ線像では、すでに上下椎体間の間隙は全く埋められているのを認めた。

よつて吾々は、脊椎カリエスの病巣廓清術には原則として骨移植による椎体固定術を採用すべきであると思う。

(3) 板挺子矯正ギプス繃帯による新鮮踵骨体部骨折の経験例

橋本 東, 松村友昭

転位を伴う踵骨体骨折の非観血的整復及固定は、その何れもが非常に困難である。最近我々は骨片転位を伴う典型的な踵骨々折に対し、森田講師の指導のもとに氏の考按せる「てこ矯正ギプス包帯」を応用し整復、固定に成功した。症例は28才男子にて、受傷後3日目に腰髄麻酔のもとに踵骨後端にキルシュナー鋼線を横に通じ、それと連絡せる長板の槓杆力により槓挙し、踵骨後端を引下げ同時に踵骨後方骨片の前端を上へに押し、透視のもとに完全に矯正その位置にて無痛ギプス包帯を行つた。経過は3週間目ギプス及鋼線除去、5週目歩行開始現在11週目になるが、踵骨萎縮があるが踵骨の位置並びに形状は全く正常に治癒してい

るが、踵部に圧迫のため壊死創を認める。この壊死部の治癒及び足関節の機能回復まで補助器を装着さす積りである。

(4) 前立腺肥大症の別出治験例

武 下 浩

慢性尿中毒症を思わせ、高度に進展した71才の前立腺肥大症患者に、恥骨後前立腺剥出術 (DAVID PRESMAN による MILLIN 氏法の変法) を行つて良好な結果を得た。

本法は、手術野が広く、従来行われた術式に較べて操作が容易で、又理論的にも前立腺に達する最短径路であり、手術操作中に重要な器官或は組織の損傷のないことが、他法に優れている。本法は、前立腺を後部尿道の一部と共に切除して、前立腺被膜をもつて尿道欠損部を補うために、術後レ線、経肛的触診上、丁度腫瘍が残つているようにみえるが、これは既に膀胱の一部と化した被膜で、全く排尿障害の原因とはならない。

併し、本法に関して、尙幾つかの欠点があげられているので、施行にあつては症例によつて充分注意が必要と思われる。

(5) 大量下血を主徴とせる腸結核の2治験例

宅 間 皓

暗赤色血液の大量肛門よりの出血を主訴として来院せる患者に開腹手術をなし、その1例は盲腸粘膜からの出血によるもので、出血部位の切除及び廻腸、横行結腸吻合術を行い、他の1例は廻腸末端より130cm口側の廻腸粘膜からの出血によるもので廻腸切除術を行ひ2例とも極めて稀なる比較的限局せる腸結核潰瘍よりの大出血であつた患者で、いずれも外科的手術により、4~5年来時々反覆せる大量下血を根治せしめたる2症例を経験したので報告し、若干の考察を加えた。

(6) 肺臓癌の1例

杉本雄三, 松村 浩

63才の女子で、入院6ヶ月前より呼吸困難、咳嗽、全身倦怠があり、肺結核及結核性胸膜炎として治療されて来た。左胸膜腔に多量の滲出液があり、透明粘黄色の痰液の中に膜状に血液が浮遊して拭がらない。而も穿刺毎に可成大量の血液を含んでいる事から肺臓癌の疑診を下し、右大腿明孔孔附近及び左鎖骨上窩に転移と思われる腫瘍を発見し、滲出液沈渣と転移腫瘍穿刺液から、パパニコロウ染色を行つて全く同一の組織

胞を発見し、肺癌の診断を下した。死後剖検によつて、左肺は無気肺を呈し、肺実質内下部にクルミ大の腫瘍を認めた。肺腫瘍及び大腿部転移腫瘍の組織像は、いずれも強いて云えば円嚢上皮癌と云うべきものであろう。尙本患者は女子であり乍ら喫煙常習者であつた。

学会提出演題

- (7) 放射性カルシウムによる仮骨石灰化に関する実験的研究

吉峰泰夫, 大石 宏, 荻原一輝

- (8) 末梢神経交叉縫合に関する実験的研究

渡 辺 浩 策

- (9) 骨黄色肉芽腫症について

山田憲吾, 土居秀郎

- (10) 脊髄神経と迷走神経との吻合

石 井 昌 三

- (11) 放射性同位元素Ca⁴⁵を追跡子とせる実験的関節結核の石灰代謝特にその骨萎縮に関する研究

吉峰泰夫, 大石 宏

- (12) 経静脈性脂肪輸入に関するその後の研究

日笠頼則, 西野忠久, 巽 亘
妹尾 覚, 長 洋, 端野博康

- (13) 仙腸関節結核に対する病巣廓清術と骨移植

桐田良人, 藤田英和

- (14) 乳腺腫瘍の内分泌学的研究

増田強三, 西谷奎吾, 伊勢田幸彦

- (15) 腰部椎間板ヘルニアに対する骨形成的偏側椎弓切除術の改良(骨形成的部分的椎弓切除術)

近藤鋭矢, 桐田良人

- (16) 骨関節結核病巣廓清術の遠隔成績(中間報告)

近藤鋭矢, 山田憲吾, 桐田良人
吉峰泰夫, 赤星義彦, 大谷 碧
兵庫国立療養所 大谷 寿

- (17) 脾全切除の臨床と実験

本 庄 一 夫

昭和29年5月例会

- (1) 胸壁内被細胞腫の2例

日 外 芳 孝

75才, 男子の肋膜に原発した内被細胞腫と58才, 男子の右第6肋骨の血管内被細胞腫の2例を報告し, 同時に文献的考察を試みた。

- (2) 頸動脈球部腫瘍の1剔出例

木 村 準 二

- (3) 広汎な頭蓋及び頭皮全欠損に対する筋膜及び皮膚の遊離移植

土 倉 一 郎

右前頭部皮下に癰回再発した肉腫剔出後の広汎な硬膜, 頭蓋骨及び頭皮の全欠損に対し, 前後2回, 硬膜欠損には大腿筋膜を, 骨及び皮膚欠損にはクラウゼ氏皮膚弁の遊離移植を行い, 各回共術後間もなく移植皮膚表皮層が乾燥し, 木乃伊様となり乍ら移植弁は脱落する事なく, 奇異な治癒の仕方をした1例を経験した。かかる治癒の仕方は他の部位では経験した事がないので, 頭部だけに見られる特別な治癒の仕方ではないかと考えられる。之には恐らく移植弁の下にある脳脊髄液が何か重要な役割を演じたのではないかと思われる。

質問 松永氏

表皮感覚の再生をも検査でみとめられる様な意味で

の成功と云われるのでしょうか。物質欠損を補い得たと云う意味をさされるのでしょうか。もし前者であれば貴重なデータが得られると思うのですが。

- (4) 先天性膀胱外翻の1例

吉 川 恵 庸

臍ヘルニアを合併せる極めて稀な先天性膀胱外翻の1例を経験した。

症例 生後4ヶ月の女児

主訴 恥骨上部, 臍部に於ける無痛性膨隆

処見 臍部に約鳩卵大のヘルニアを認め恥骨縫合上部に約一銭銅貨大の肉芽様の粘膜, その左, 下部に1個の小孔ありて, こより尿様の液体の排出を認めた。患者が乳児なる為局所処見だけでははつきりしなかつたし又手術の関係もあるのでレ線検査を行い, 膨隆は膀胱粘膜, 小孔は左輸尿管口なる事がはつきりした。又恥骨は離開していた。

手術 依つて先ず一次的に膀胱固定術, 二次的に骨盤成形術を行う方針で一次手術を施行したが下手術後16時間目に死亡した。

此の症例に付て文献的考察を加えた。

- (5) Calvé扁平椎の1例

中 脇 正 美

Calvéが結核性脊椎炎と類似の症状を呈するがX線

像で椎間軟骨部の幅が増大し椎体のみが扁平化する一病型を分類して以来 Calvé 病と呼ばれる稀有なる疾患にして私は4才の女兒に於てその1例を経験した。

初診時下部胸椎より腰椎部における症状を考慮してX線診断をなしたため第3回診察時に至り漸く本症なることを知った。

約1ヶ年間ギブス固定経過観察を行つて来たがX線像では未だ扁平化された第4胸椎々体の正常復帰像は証明されない。

(6) 厚生年金玉造整形外科病院に於ける 小児麻痺患者の統計的考察

坪倉 健, 大塚哲也, 中脇正美

私達は玉造整形外科病院に於ける小児麻痺(脊髄型)患者に就いて統計的考察を行つた。

好発部位, 発病時期, 初発症状としての発熱等は諸氏の報告と略々一致する。性別に於いては甚だしい差異は認められない。麻痺部位に就いては井手, 鶴田氏は右下肢, 真下氏は左下肢に多しとしているが大差を認めなかつた。

本症患者の智能状況は興味を引く事実であつて就学児童の93%が中以上の成績を得ており殊に上位に属するものが31%の多数を占めている。

(7) 肺葉切除後の急性胃拡張及び肺部分 切除後頑固な気管支喘息を来せし症 例

矢島忠久, 岩下弘一

高松日赤で過去3年間肺結核に手術治療を加えたものは, 79例中, 虚脱療法45例, 直達療法34例, 外に縦隔洞腫瘍の摘出1例があり, 死亡例は1例もなく略々満足な経過をとつて居る。その中表題の2例に就き, 次の様な結論を得た。開胸手術の後では, 腹部及び胸部の迷走神経異常興奮を来すと云う事実に基づき, 開胸術の前後を通じ, 合併症としての急性胃拡張に注目し術後の食事の摂取等には充分の注意を払う必要があること, 又喘息患者に対する肺侵襲は, 大発作を誘発する危険があるから, 充分の注意を払う必要のある事を吾々の経験より強調し度い。又この際副交感神経遮断剤の使用は試みるべき方法と考える。以上に就き多少の文献的考察を加えた。

追加 麻田

胸部大手術後には一般にカリウム欠乏症がおこり, これにより胃拡張症状が出る事が多い。かゝる際に塩化カリを per os に与える事により, 直に治癒するものであることをわれわれはしばしば経験している。カリウム欠乏症はEKGにより容易に診断しうるので術後にEKGを適時おとりになる事をすすめる。

第2例は皮下気腫が発現したことから気管支支障がおこつたと思うべきである。気管支支障の予防としては, 気管支造影で切断部位気管支の結核性変化なき事をたしかめた後(化学療法を充分に行つた後)或は変化のみとめられない気管支の部位で, 切除を行う事が要請

と思う。

(8) 先天性橈尺骨癒着症の1治療例

山田 栄, 中脇正美

Lenoire が1827年に発見し Sandifort により臨床的に先天性回外運動障碍として初めて記載した, 稀な疾患で, 我々は2才の女子の右前腕骨に, X線像で確め得た先天性橈尺骨癒着症の1例に遭遇し, 之に癒着部の剝離後に生筋膜挿入並に橈尺骨の骨切り術を施行して能動回外運動性を得た。

質問 吉峰

生筋膜を使用されて, J. K. 膜等使用する時の如き Reizerscheinung の有無。廻内, 廻外運動が略正常に近くなる迄の後療法について, 及びその期間等についてお伺いしたい。

(9) 結核性副睪丸炎と誤れる多房性副睪 丸嚢胞の1例

福島 浩三

副睪丸疾患中その約半数を占めるものは結核性副睪丸炎ですが, これと術前鑑別診断困難にして摘出腫瘍の病理組織学的検査の結果副睪丸頭部に存在した約小指頭大の多房性嚢胞であつた1例を経験したので, 症例報告を兼ねて確定的診断を下すに到るまでの臨床並びに病理組織学的所見を報告, その形成に関して簡単な考察を試みた。

質問 田辺賀啓

本症例の手術時に於ける睪丸の所見は如何, 今後斯かる例に睪丸剔出術を行うことの可否に就いて演者の考え如何。

(10) 癌細胞を発見せる Elephantiasis Gastrointestinalis の2例

景山直樹, 仲田清尙, 横田 彰

我々は以前南病舎で経験し, 一昨年京都外科集談会で発表した Elephantiasis Gastrointestinalis 2例の切除標本を後日再検査した結果癌細胞を認めたので報告した。而して両例共慢性腸狭窄症状で来院したが, 胃癌の大腸転移による大腸の象皮病様変化に由るものである事が考えられる例であつた。

この両例は次の2点から興味ある例と思う。

1) 従来胃癌の斯くの如き大腸転移の報告例は認められないので, 特殊な転移形式であると思う。

2) 従来慢性炎症性腫瘍に象皮病様変化のある事は認められていたが, 腫瘍性の者の報告は見られない。従つて今後斯くの如き大腸の象皮病様変化を認めた場合腫瘍性のものもある事を念頭に置く事が必要と思う。

(11) 内分泌失調に基因せる肥胖症の1例

井戸 信一

2才6ヶ月の女子。体重 29.5kg, 身長 99cm。原因不明であつた。視床下部らしくもあり, 副腎皮質性らしくもあつた。